

2005 年度・日本演劇学会全国大会（於 大阪大学）「演劇教育の現在」 6月18日（土）

臨床的教育研究のための演劇的問題表象アプローチの探求

龍谷大学 秋葉昌樹

[http://homepage3.nifty.com/akiba\\_y/](http://homepage3.nifty.com/akiba_y/)

(1) 「名前のない教育問題」へのアプローチ：なぜ「演劇的」なのか？

本報告では、今日の教育学研究・教育めぐる以下2点の問題関心に基きつつ、教育学研究・教育の文脈に演劇的アプローチを導入する意義を考察したい。

- (a) 今日の教育学が、問題状況をはらむ教育の現場に住まう人々の個別・具体的な現実から掛け離れた地平で展開しているのではないかということ（臨床的教育学構想の要請）。
- (b) 関連して、大学における教育学教育について、とりわけ初期教育・導入教育の文脈での学習効果を念頭におきつつ、これをどのように刷新すべきか、ということ。

周知のとおり、(a)に関しては、昨今の教育学会、教育社会学会等で“臨床的研究”の必要性を問う議論として持ち上がり、教育学系学問の存在意義を問い直す試みが続けられている<sup>1</sup>。

他方(b)に関しても、個々の高等教育機関でFDの取り組みがはじまるなか、盛んな議論が繰り広げられつつある。

教育学がそもそも実践の場を離れた地平において成り立たない学問領域であるとすれば、今日教育学系の学会で緩やかに共有されている(a)の問題意識は、教育学のあるべき姿の回復の試みを含む意味で主として研究の臨床性を志向するものであり、他方(b)に関して、学生のアクチュアルな感覚から乖離した教育学教育のありようを問い直す試みと考えるならば、教育の臨床性を志向するものと言ってよいだろう。両者は一体不可分の取り組みとなるはずである。

しかしこれら臨床教育学ないしは教育臨床学の構想とは裏腹に、(a)に関する現状は、かつては「教育病理学」、今日では「教育問題」として語られる“いじめ、不登校、保健室登校、学級崩壊、ひきこもり等々”、トピックとしての臨床へと研究者の関心を照準させ、問題の語りの研究（=教育問題の構築主義的研究<sup>2</sup> など）をもたらしたにすぎないのではないか。

<sup>1</sup> たとえば日本教育学会の紀要（『教育学研究』第69巻第4号、特集「教育における臨床の知」、2002年）や日本教育社会学会の紀要（『教育社会学研究』第74集の特集「教育臨床の社会学」、2004年）で臨床特集などが組まれている。

<sup>2</sup> キツセ&スペクター1977(1990)以降の「社会問題の構築主義」に影響を受けた研究

このことは、冒頭に(b)として掲げた教育学教育の問題構造とも密接にリンクしている。メディア（新聞からネット検索まで）は充実し、学生は、容易く教育問題について読み、教育問題について語り、教育の現状について問題視することもできるのだ（=教育問題のリアリティ）。

基本的な問題の構図は、当事者の問題と直接向き合っているはずの心理臨床の場合であっても同じである。当事者の問題は、生きられた現実からプレイルームないしはカウンセリングルームの中の現実へと転換され、<sup>ケースカンファレンス</sup>事例検討会等においては一定のフォーマットにおいて臨床家が物語化した上で検討されることにもなるからである（秋葉 2001、2004a, b、秋葉・広川 2005）。

すなわちいずれの場合も、当事者の現実<sup>リ</sup>に外<sup>ア</sup>在<sup>リ</sup>する<sup>テ</sup>クス<sup>ト</sup>を産出しつづけ「研究という営みが、当事者に生きられる現実を疎外」することにほかならないのではないか（秋葉・広川 2005：19）。

以上をふまえつつ、本報告では、臨床的トピックとして語られ=テキスト化される教育問題の背後で疎外されるやしれない当事者の<sup>アクチュアルな</sup>現実的問題を、ベティ・フリーダンがかつて『新しい女性の創造』のなかで問題提起した「名前のない問題」になぞらえ、かりに「名前のない教育問題」と呼ぶことにしよう。

「名前のない教育問題」は、いったん名づけられ問題として構築（トピック化）されたならば、解消される問題ではない。「名前のない教育問題」は、臨床的トピックとして学問的に創造されるテキストのすき間から絶えずこぼれ落ち、はみ出し、あふれ出す、当事者のいま・ここの現実にある。それは、臨床的教育学の残余カテゴリーではないはずである。

## (2) 「演劇的問題表象のメソドロジー研究」の理念型と臨床的教育学の転回

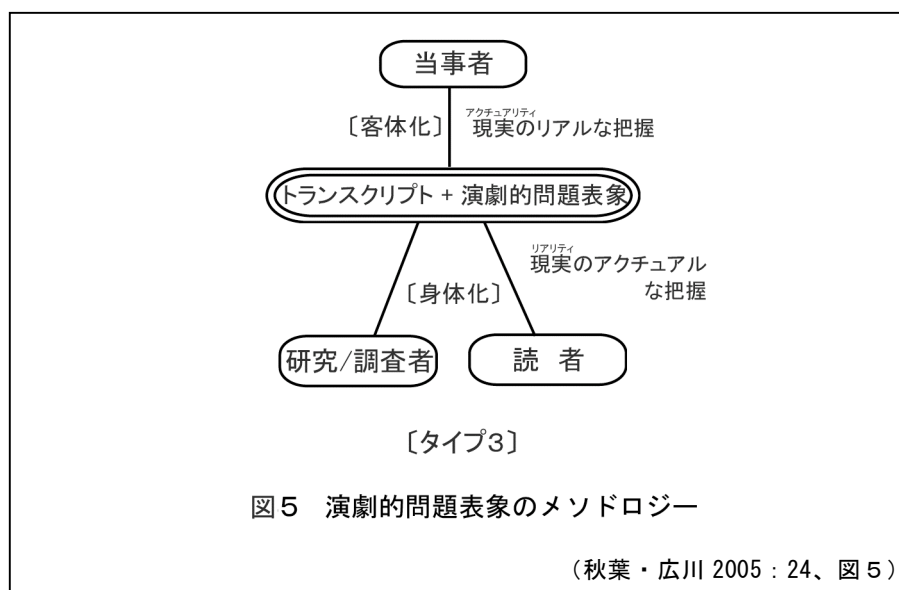
報告者が秋葉・広川論文（2005）において「演劇的問題表象のメソドロジー研究」と名づけ、主として演習授業のなかで取り組んでいる教育・研究の実践は、本報告で述べる「名前のない教育問題」と向き合うものである。ゼミ生は、即興劇によって個々に感受する教育問題と向き合い、エスノメソドロジー研究の観点から会話分析<sup>3</sup>を行いつつリフレクションする。この、昨年度より開始した教育・研究プログラムのモデルは次のとおり<sup>4</sup>である。

<sup>3</sup>エスノメソドロジー研究は、1950年代にH. ガーフィンケルにより始められ、ガーフィンケルとE. ゴフマンのもとで育ったH. サックスらにより今日の研究スタイルの素地が創られた。

今日エスノメソドロジー・会話分析研究は、実際の社会的場面における人々のやりとり（相互作用）を映像/音声記録にとり、会話データを中心に、それぞれの発話の重なり合いや間合い等をも含め書き起こしたトランスクリプトを作成する。トランスクリプトに基づく分析は、やりとりの当事者たちが、発話の重なり合いや間合いをどのように気にかけて/気につけないでやりとりを進めていくの、順を追って試みていくことが基本となる。そうすることで、彼/彼女らによって生きられる「いま・ここ」の現実が行為遂行的に達成されていく際のメカニズムがエスノメソドロジー（=人々が現実をつくりあげる方法論）なのである（Garfinkel1967、Garfinkel& Sacks1970）。

教育学の領域には、H. Mehan（1979）らの教育社会学者が学校内部の生活誌を研究する際に導入し、今日では「教育のエスノグラフィー（民族誌）研究」の一領域として位置づけられつつ、さらには教育方法学の「授業の質的研究」へと裾野を広げつつある。詳細は秋葉（2004a）ほか→[http://homepage3.nifty.com/akiba\\_y/gyoseki.html](http://homepage3.nifty.com/akiba_y/gyoseki.html)。

<sup>4</sup>さらに本年度は、報告者の本務校の学内FDプロジェクト（龍谷大学・大学教育開発センター・自己応募プロジェク



モデルをつうじて示そうとしたのは、次の点である。

(i) 即興により、研究主体が自らの演じる身体 (=メディア) を介し、問題状況に遭遇した際の当事者性を感知しつつ表象すること (=演劇的問題表象)。自らの身体性を看過するとき、臨床的教育学の営みは、表象性の危機を免れえず、「名前のない教育問題」は残されるだろう。

(ii) エスノメソドロジー・会話分析により、即興劇を相互行為のコンテクストごと書き起こすこと (=トランスクリプト化)。書き起こす作業を通じ、研究主体は否応なく即興を演じる自らのありようと対峙することになるだろう。

図にもみられるように、このモデルの基本的特徴は、(i) (ii)を組み合わせ、これを臨床的教育学のコアに据えることで、(iii)研究という営みをめぐり想定される三つの主体 (研究/調査者、当事者、読者) 間のハイアラーキーを解体し、また(iv) 研究実践の実際上の手続きにおける入口から出口へと向かうリニアなモデル (秋葉・広川 : 20、図1) を排するところにある。演劇的問題表象によって、研究/調査者および読者は、トピックとして共有化/公共化された (=リアルな) 教育問題を身体性の次元で捉え直す。またトランスクリプトは、当事者にとってはアクチュアルな問題を客体化するベースとなる。読者にとってはトランスクリプト化された現実の表象を再体験することによって当事者のアクチュアリティを身体化することにもなるだろう。

このモデルを実施するにあたり、演習授業のなかでは、次のような手続きを踏んだ。

ト<sup>4</sup>)として進めている。昨年度より秋葉担当の演習授業で T. A. を担当する広川義哲 (文学部博士後期課程:教育哲学) との共同研究をベースに、報告者=秋葉 (文学部 : 教育社会学) を代表に、中根真 (短期大学部 : 社会福祉) を共同研究者とし応募し、広川も加え研究を進めている。詳細は [http://www.ryukoku.ac.jp/fd/pro\\_ichiran.html](http://www.ryukoku.ac.jp/fd/pro_ichiran.html) (龍谷大学・大学教育開発センターホームページ)。

(1) 数名ずつの学生により即興劇のグループを構成し、各グループは互いの即興劇をビデオに撮影し（DVD化）、その記録をもとにトランスクリプトを作成する。

(2) 各グループは、よりリアルな場面を構成するために自分たちの即興劇を分析、劇の再演を実施する。

演劇的問題表象とトランスクリプトの作成・再体験のプロセスにおいてゼミ生は、上記の三主体それぞれの立場を代わる代わる体験し、リアリティとアクチュアリティとを往還する（秋葉・広川：31-32）。このことが、研究の入口から出口に至るプロセスにおける三主体の区分を次第に融解させ、従来の臨床的教育学の取り逃がしてきた「名前のない教育問題」と向き合う基盤をつくりだすことにつながるのではないだろうか（=臨床的教育学の転回）<sup>5</sup>。

## 文献

秋葉昌樹 2001 「保健室登校からみる不登校問題：教育の臨床エスノメソドロジー研究の立場から」『教育社会学研究』第68集, 85-104頁, 日本教育社会学会

秋葉昌樹 2004a 『教育の臨床エスノメソドロジー研究：保健室の構造・機能・意味』東洋館出版社

秋葉昌樹 2004b 「『教育の臨床エスノメソドロジー研究』の展開：演劇的教育実践へ向けて」学校社会学研究会第22回大会(長良川会館、8月4日)

秋葉昌樹・広川義哲 2005 「演劇的問題表象のメソドロジー序説：リアリティとアクチュアリティの往還と教育研究における臨床性」龍谷大学教育学会編『龍谷大学教育学会紀要』第4号, 17-35頁,

ベティ・フリーダン 1963 (2004 三浦富美子訳) 『新しい女性の創造』大和書房

Garfinkel, H. 1967 *Studies in ethnomethodology*. Englewood Cliffs

Garfinkel, H. and Sacks, H. 1970 "On formal structures of practical actions," in J.C. McKinney and E.A. Tiryakian (eds.) *Theoretical sociology: Perspectives and developments* (pp. 337-366). Appleton-Century-Crofts

キツセ、J. I. & M. B. スペクター 1977 (1990 村上直之ほか訳) 『社会問題の構築：ラベリング理論をこえて』マルジュ社

Mehan, H. 1979 *Learning lessons: Social organization in the classroom*. Cambridge

---

<sup>5</sup>以下では、昨年度の即興劇の様子を収録したDVDビデオおよびそのトランスクリプト、今年度進行中の「人間彫刻」写真づくりのプロセス（ホームページ）とを紹介しつつ、演劇的問題表象のメソドロジー研究の可能性を具体的にみていくことにしたい。